

電子版市民プレス

Ⅱ 室町時代 Ⅱ

補遺④

人々の暮しと文化 屏風絵と絵巻から

つきなみ
『月次風俗図屏風』

第二扇 花見の様子



第四扇 集団で田植えをする人々、その傍らで豊作を願って踊り人々を描く

『七十一番職人歌合絵巻』

姿絵 五十一番

縫物師と組師（組紐職人）



東京国立博物館に
展示された模本



八曲一隻の
小屏風



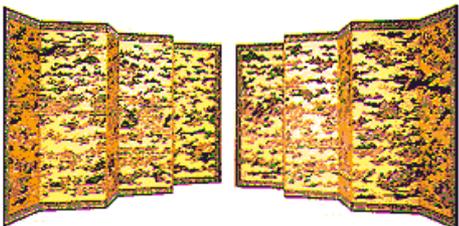
花の御所



左隻左下

『洛中洛外図屏風』 上杉本

六曲一双（二隻）



タブレット地域紙「市民プレス」の電子版として編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

PAGE 4	十二ヶ月の行事を描いた月次絵
PAGE 5	小型の屏風絵「月次風俗図屏風」には・・・
PAGE 8	第三扇…田植
PAGE 14	『七十一番職人歌合絵巻』は・・・
PAGE 15	歌合絵巻に登場する職人と画中詞
PAGE 25	「洛中洛外図屏風」は・・・
PAGE 27	洛中洛外図屏風の右隻と左隻
PAGE 31	陶板で洛中洛外図をつくる・・・
PAGE 33	室町時代の民衆の文化

Ⅱ室町時代Ⅱ人々の暮しと文化 屏風絵と絵巻から

農村では、自治的な共同組織（惣そうという）が作られ、人々の結びつきが強くなる。農業技術は進歩し、田を耕すのに牛や馬も使われて作業が捗るようになって、米の収穫量も増える。都では、農産物を売る店もでき、明から輸入された貨幣が使われ、経済活動は活発になって、土倉どくら（倉庫保管から金融業へと展開した業者、現在の質屋）、酒屋さかや（酒造業から金融業へと展開した業者）などの裕福な商人が現われる。お金を利子を取り、寺院も金融業を営んだ。

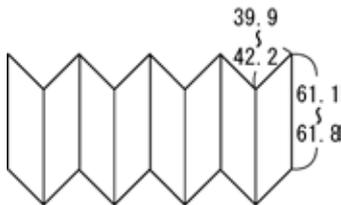
人々の暮らしを描いた屏風絵から当時の文化が偲おもばれる・・・

月次絵つきなみえは、平安時代から人気があった大和絵のジャンルで、一年間の行事や風俗を画題とした連作だが、ここに取り上げる「月次風俗図屏風」つきなみ（重要文化財・国立博物館所蔵、旧岩国藩主吉川家由来）は、公家・武家・庶民の生活を十二ヶ月の行事に分け、活き活きと描いた八曲一雙の屏風絵である（作者は不詳）。

屏風（一風を屏ふすまぐもの）に由来する名称）は、部屋の仕切りや装飾として古くから使われ、

わが国で現存するのは、八世紀に作られたもので、正倉院に保管されている。屏風には繪が描かれ、屏風絵に優れた絵師の作品が残された。

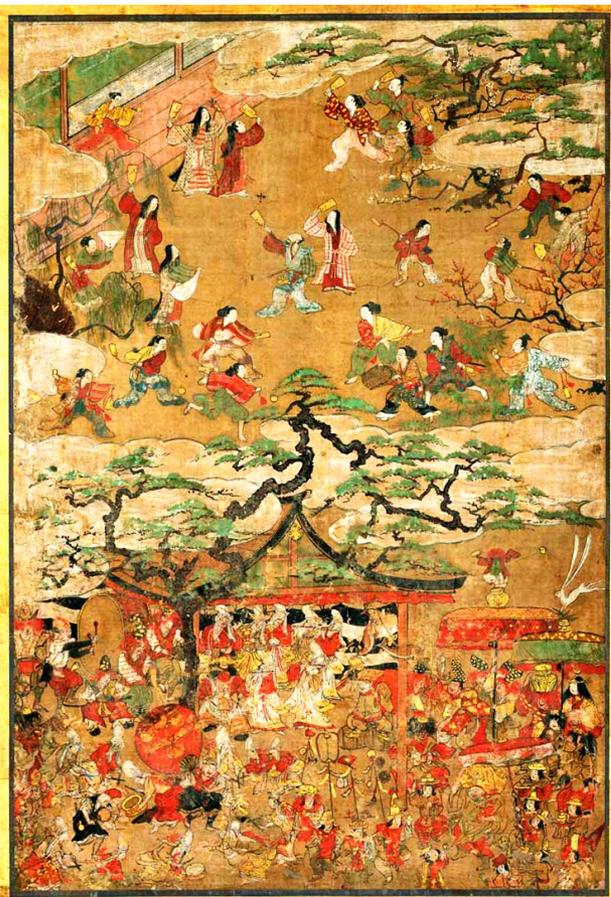
一隻せき（屏風の単位）六扇（細長いパネルを一扇という）が一般的で、右側の右隻、左側の左隻の二隻を一双として、絵を描いた六曲、一双形式が定型となった。だが、この「月次風俗図屏風」は、八曲一隻の紙本着色、一扇の縦約六十、横約四十センチメートルという、小型のサイズ（卓上用？）の画屏風である。



「月次風俗図屏風」には・・・

公家・武家・庶民の生活を十二ヶ月の行事に分けて描いている。第一扇のテーマは正月の羽根突、毬打、松囃、第二扇は花見、第三・四扇は田植の様子、第五扇は賀茂競馬と衣更、第六扇は犬追物と蹴鞠、第七扇は富士の巻狩、第八扇は春日社頭の祭と雪遊びが描かれ、俯瞰した表現が使われている。大和絵の本流からはやや離れた絵師の作品と推定されている。

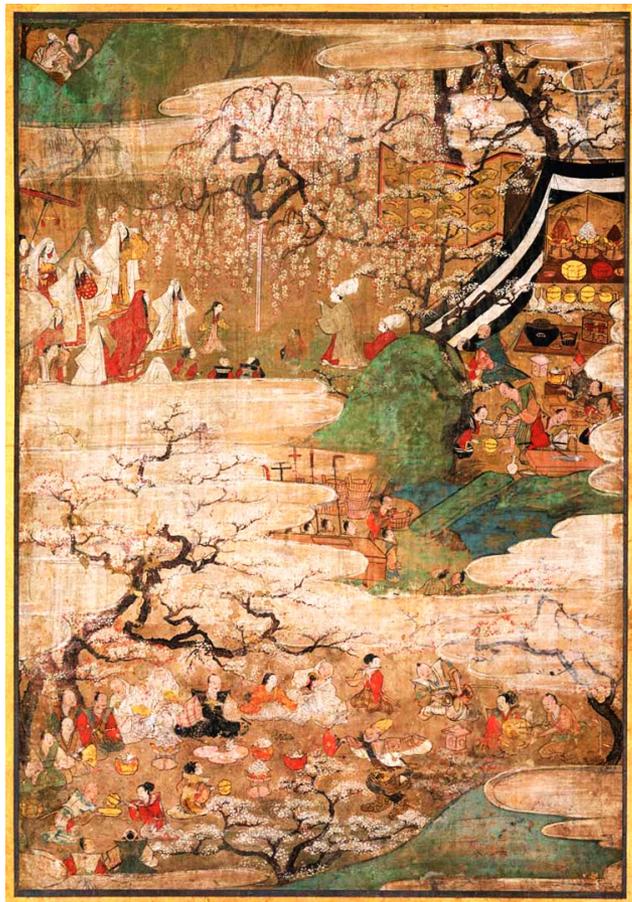
第一扇：正月の羽根突、毬打ぎちよ（当時流行した球戯）、松囃まつばやし（新年の芸事）



第三扇・田植



第二扇・花見

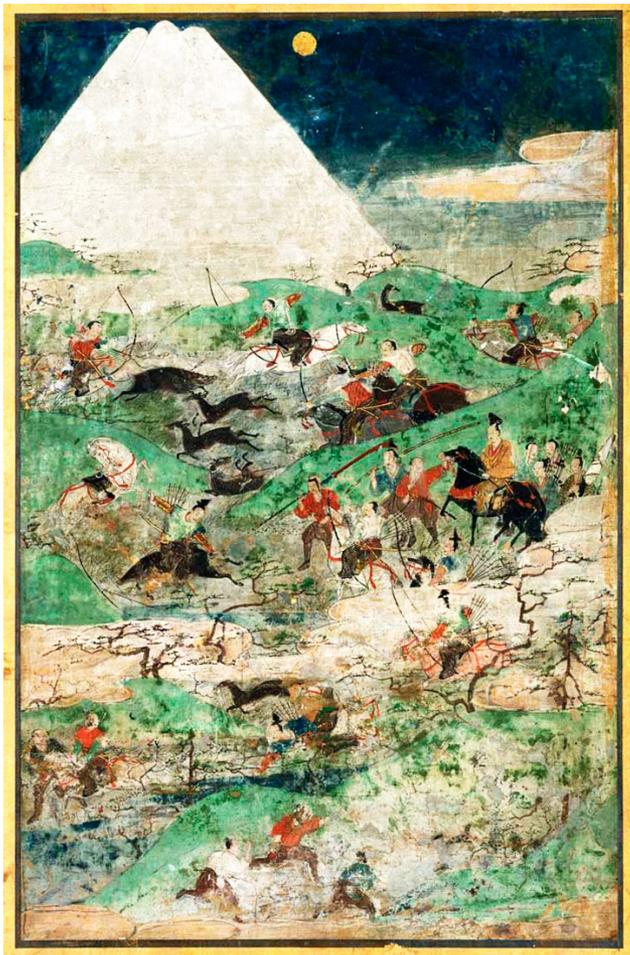


第四扇・田植



第五扇・賀茂競馬と衣更ころもがえ





第七扇 富士の巻狩
まきがり



第六扇 犬追物(弓術の一)と蹴鞠
いぬおろもの



「しちじゅういちばんしよくにんうたあわせ」
「七十一番職人歌合」

七十一番、百四十二職種の職人姿絵と画中詞、および詠者が職人に仮託して、月と恋を題材とした左右二百八十四首の和歌とその判詞が収められている。「職人歌合」は、鎌倉時代、室町時代、それぞれに二作品が知られているが、「七十一番」は、題材とした職人の数が最大で、姿絵と「画中詞」・口上も記され、『七十一番職人歌合絵巻』とも呼ばれている。作者は複数の上層の公卿家人とされ、その中の一人には、堂上家の飛鳥井雅康が含まれ、二十四首が修められている。また絵の筆者は、土佐光信、詞書の作者は東坊城和長、画中詞は三条西実隆と推測されている。明応九年(1500)ころ成立したという。

原本および室町時代の伝本は不明だが、後世には多くの写本が作成された。ここで紹介する絵巻は、国立博物館所蔵の写本に拠る。同書は、紙本着色の三巻で、各巻のサイズは、約32cm×19～20cm、序文は無く、月を題材とする左歌・右歌、判詞、恋を題材とする左歌・右歌、判詞が記され、その後左右の職人像が描かれている。上巻：一～二十三番、中巻：二十四～四十六番、下巻：四十七～七十一番を納め、巻末には、弘化三年(1820)に模写した法印養信・法眼雅信の名とともに「右絵之詞道遥叟(三条西実隆)之花翰也」「職人尽歌合三巻 土佐光信筆」と極書きまめがきされている。

登場する職人と画中詞

発言の順番で

一番 番匠と鍛冶

一番 番匠ばんじょう「我々もけさは相国寺へ又召され候。暮れてぞかへり候は
んずらむ。」鍛冶かぢ「京極殿より打刀を御あつらへ候。大事に候かな。
かたるべきと。」

二番 壁塗かべぬり「やれやれ、うばらよ 家にて鏝猶とりてこ 壁の木工ま
いりて候 下地とくして候はばや」檜皮葺ひはだかぎ「この棟がはらがをそぎ」

三番 研とぎ「さがおもき 今小をさばや 主に問ひ申さん はばやさ
はいかに、手を切るぞ」塗士ぬし「よげに候 木搔のうるしげに候 今
すこし火どるべきか」

四番 紺搔こんかき「たゞ一しほ染めよとおほせらるゝ」機織はた織り「あこ、やう
管もてこよ」

五番 檜物師ひものし「湯桶にもこれはことに大なる なののために、あつら
へ給ふやらう」車作くるまづくり「檳榔の輪とて、よくつくれとおほせ候」

二番 壁塗と檜皮葺治



三番 研と塗士



六番 鍋壳なべうり「播磨鍋かはしませ 釜もさふらうぞ ほしがる人あらば
仰られよ 弦をもかけてさう」酒作さかづくり「先酒召せかし はやりて候う
すにこりも候」

七番 油壳あぶらうり「きのうからいまだ山崎へもかへらぬ」餅壳もちあぶり「あたゝか
なる餅まいれ」

八番 筆結ふでゆひ「兎の毛は、毛のうらおもて見えぬが大事にて候」筵打むしろうち「て
しま筵かうしまへ 御座も候ぞ」

九番 炭焼すみやき「けさ出でさいまうたか」小原女おはらめ「あごぜは、まいりあ
ひて候けるか」

十番 馬買うまかはふ 皮買かわかはふ

十一番 山人やまびと「ことしは秋より寒くなりたるは」浦人うらびと「この縄、は
や切るゝは たがうれ」

十二番 木伐きこり 草刈くさかり「伏見草とて、世にもてなさるゝみ秣よ」

十三番 烏帽子折えぼしをり「今時の御烏帽子は、ちとそりて候」扇壳あふぎうり「扇は
候 みな一ぼん扇にて候」



十四番 帶売「此帶たちてのち見候はむ いそがしや」白物売「百
けも、なからけもいくらも召せ いかほどよき御しろいが候ぞ」

十五番 蛤売「ひげのあるは、家の恥にてさうぞ ことのほかなるひ
げのなきかな」魚売「魚は候 あたらしく候 召せかし」

十六番 弓作「此弓は弦を嫌はんずるぞ にべおり、大事なるべき」
弦売「弦召し候へ ふせづるも候 せきづるも候」

十七番 挽入売「これは因幡合子にて候 召せ」土器造「赤土器は
召すまじきか かへり足にて安く候ぞ」

十八番 饅頭売「けさは、いまだ商ひなき、うたてさよ」
法論味噌売「われらもけさ、奈良より来て、くるしや」

十九番 紙漉「さゝやかしが足らぬげな」賽磨「さしちがへの賽も
召し候へ 犬追物のいきめも候ぞ」

二十番 鉦細工「仕返し物は、札頭がそろはで」轆轤師「木が足
らで、いそぎのもの遅くなる いかゞせむ」

二十一番 草履作「じやうりじやうり 板金剛召せ」硫磺箆売「ゆ
わうは、きゆわうは、き よき箆が候」

二十二番 傘張「荏の油が足らぬげな」足駄作「目のゆがみたるから、
心地あしや」

二十三番 翠簾屋「新御所の御移徙ちかづきて、いそがはしきよ 近
衛殿より御いそぎの翠簾にて」唐紙師「糊がちと強ければ、きらゝ
を入れよ」

二十四番 一服一銭「粉葉の御茶、召し候へ」煎じ物売「おせんじ
物おせんじ物」

二十五番 琵琶法師「あまのたくもの夕煙、おのへの鹿の暁のこゑ」
女盲「宇多天皇に十一代の後胤、伊東が嫡子に河津の三郎とて」

二十六番 仏師「阿弥陀の像、先蓮華座をつくり候 おりふし法師ば
らたがひて、手づから仕候」経師「この巻切り、いかにしたるにか
切り目のそろはぬよ」

二十七番 蒔絵士「此御たらひは、沃懸地にせよと仰られ候 手間は
よもいらじ」貝磨「この太刀の鞘は、莫大の貝が入べき」



二十八番 絵師「墨絵は筆勢が大事にて候」冠師「別当殿の御拝賀に召さるべき御冠にて候 いそがしや」

二十九番 鞠括「難波殿は大がたを御このみある」杵造「鞠括は、はたかなるがわろきと」

三十番 立君「すは御らんぜよ けしからずや」凶子君「や、上臈いらせ給へ ゐ中人にて候 見しりまいらせて候ぞ いらせ給へ」

三十一番 銀細工「南鐐のやうなるかねかな」薄打「南鐐にて、打ちでわろき」

三十二番 針磨「こぼりは針孔が大事に候」念珠挽「数とりと七への玉、むつかしきぞ」

三十三番 紅粉解「御べにとかせ給へ 堅べにも候は」鏡磨「白みの御鏡は、磨ぎにくく侍」

三十四番 医師「殿下より続命湯、独活散を召され候間、たゞ今あはせ候」陰陽師「われらも今日は、晦日御祓持参候べきにて候」

三十五番 米売「なを米は候 けさの市にはあひ候べく候」豆売「われらが豆も、いまだ商ひをそく候ぞ」

三十六番 いたか「流灌頂ながさせたまへ 卒塔婆と申すは大日如来の三摩耶形」穢多「この皮は大まいかな」

三十七番 豆腐売「豆腐召せ 奈良よりのぼりて候」素麺売「これは太素麺にしたる」

三十八番 塩売「きのうふのく樽売のあたひまで、けうたまはる人もがな」麴売「上戸たち、御覧じて、よだれ流し給ふかな」

三十九番 玉磨「是はちかごろの玉かな 火をも水をも取りつべし 念珠のつぶにはあたらもの哉」硯士「石王寺は、白身かたくて切りにくき」

四十番 灯心売 葱売

四十一番 牙脣「御ようやさぶらふ」蔵回「御つかひ物御つかひ物」

四十二番 筏士「此ほどは水潮よくて、いくらの材木を下しつらむ」櫛挽「先こればかり挽きて、のこぎりの目を切らむ」

四十三番 枕売「今一のかたも持て候 ひそかに召し候へ」畳刺「九



三十七番
豆腐売 素麺売



三十五番
米売 豆売

四十七番 文者弓取



条殿に何事の御座あるやらむ 帖をおほく刺させらゝ、
四十四番 瓦焼 「南禅寺よりいそがれ申候」 笠縫 「世にかくれなき
笠縫よ」

四十五番 鞘巻切 「当時はやらで、得分もなき細工かな」 鞍細工 「あ
ら、骨おれや」

四十六番 暮露 通事

四十七番 文者 「六韜の末は、宗と武道にて候 御稽古も候へかし」

弓取 「運は天にあり、命は義によりてかろし」

四十八番 白拍子 「所所に引く水は、山田の井戸の苗代」 曲舞々 「月

にはつらき小倉山、その名はかくれざりけり」

四十九番 放下 「うつゝ、なのまよひや」 鉢拍 「昨日みし人今日問へば」

五十番 田楽 猿楽 「総角や、とんとう、尋ばかりや、とんとう」

五十一番 縫物師 組師 「啄木は、この此召す人もなき、うたてざよ」

五十二番 摺師 「梅の花ばかり摺るほどに、やすき」 畳紙売 「御畳

紙召せ 色もよくいできて候ぞとよ」

五十一番 織物師組師



五十三番 葛籠造 「茶葛籠も候 買はせ給へ」 皮籠造 「この皮籠は
人のあつらへ物にて候」

五十四番 矢細工 「これは知久篋とて、あつらへられて候」 箆細工 「逆

頬がなくて、柳箆にする」

五十五番 墓目割 「一尺にあまる御墓目は、割りにくゝて道がゆかぬ」
行際造 「あはれ、御行際や、手色もよし」

五十六番 金堀 禾堀

五十七番 包丁師 調菜 「砂糖饅頭、菜饅頭、いづれもよく蒸して候」

五十八番 白布売 「白布めせ、なう 端張も、尺もよく候ぞ」

直垂売

五十九番 芋売 「ちかきほどに、又芋舟とをり候べく候 いかほども

召し候へ」 綿売 「綿めせ綿めせ しのぶ綿候ぞ」

六十番 薰物売 「随分此香ども、選り整へたれば、この夕暮のしめり

におもしろき」 薬売 「御薬なにか御用候 人参、甘草、桂心候 沈

も候」

六十番 薰物売 葉売



六十三番
競馬組 相撲取



六十一番 山伏「是は出羽の羽黒山の客僧にて候 三のお山に参詣申候」持者「あら、おんかなおんかな 二所三島も御覽ぜよ」
六十二番 禰宜「高天の原に神とままりましまして」巫「榊葉やたちまふ袖の追ひひ風に」

六十三番 競馬組「むかしは、上さまにももてなされし事の、今はこの氏人のみに残りて」相撲取「道の思ひ出に、相撲の節に召さればや」
六十四番 禅宗二「文字の上にをきては御不審たつべからず 若如何とならば、口を開かずして問ひきたれ」律家一「教外別伝と申候

ば、などや祖師とは仰候ぞ」

六十五番 念仏宗「即便往生もたうとく、往生も只一たび南無となふれば、極樂に生 なにの疑ひかあらん 南無阿弥陀仏」

法花宗「末法万年、余経悉滅の時、此妙法花と申せうろうは、我等が

祖師日蓮上人の御時、くれぐれと説かれ候ときは」

六十六番 連歌師「いまだこの折には、花が候はず候」早歌謡「かたみに残る撫子の」



七十番 楽人 舞人

七十一番
酢造 心太売



六十七番 比丘尼二「仏弟子は、大かた皆さこそ候へども、御尼衆も譏嫌戒といふ事は候めるは 我らはつとめ行法はおなじ事にて候坐禅工夫は、同じ御ことにてはよも候はじな それはよも教外別伝にては候はじ」尼衆一「御比丘尼も、戒門は守らせ給ふなれども、なかか飲酒をば御破り候ぞ 我らも観念と申すは、さにてこそ候へ」
六十八番 山法師「わがたつの柚の月に及ぶべき所こそおぼえね」
奈良法師「もろこしの月よりも見所あればこそ、春日なる三笠の山とはよみつらめ」

六十九番 華厳宗「御影供の御茶ののこりにて候」俱舎衆「北斗の御祈はじめ候間、ひまなく候て」

七十番 楽人 舞人

七十一番 酢造「あ、すし、きかき哉」心太売「心太めせ 鑿石も入て候」

「洛中洛外図屏風」

京都の市街（洛中）と郊外（洛外）の景観や風俗を描いた屏風で、学術的な価値が高く評価されている（一点が国宝、六点が重要文化財に指定される）。十六世紀初めの戦国時代から江戸時代にかけて制作され、十四世紀以降、定型となった六曲一双形式のものが多く、三十数点が現存している。

洛中洛外図が創られた時期については、三条西実隆の日記（『実隆公記』）の永正三年（1506）の記述が最も古い史料とされている。「甘露寺中納言来る、越前朝倉屏風を新調す、一双に京中を画く、土佐刑部大輔（光信）新図、尤も珍重の物なり、一見興有り」と記され、実隆が、従兄弟の甘露寺元長から、越前朝倉家が発注した屏風を見せられて、興味深いものだったという感想を記述している。当時の越前朝倉家の当主は朝倉貞景で、甘露寺家とは姻戚関係があった。但し、この屏風は現存していない。

洛中洛外図は鳥瞰して描かれている

右隻に京都の東、左隻に京都の西方を鳥瞰して描かれることが一般的で、戦国時代の景観を描いたものを初期の洛中洛外図といい、右隻に内裏を中心にした下京の町並みや、鴨

川、祇園神社、東山方面の名所が描かれ、左隻には公方御所をはじめとして武家屋敷群や、船岡山、北野天満宮などの名所が描かれている。また、右隻では上下が東西、左右が北南となり、左隻では上下が西東、左右が南北となっている。初期屏風の形式は「第一形式」と呼ばれ、四点が現存している。対する江戸時代の洛中洛外図は、右隻に内裏、左隻に二条城を描くものが多く、「第二形式」と呼ばれている。

季節の風物と行事、そして人物を描く

洛中洛外図、特に初期のものは四季絵または月次絵の要素を持ち、季節を表す風物や行事が数多く描かれている。例えば、祇園会の山鉾の書き込まれ、右隻に春夏、左隻に秋冬の風物や行事が描かれている。但し、季節区分などに例外も多い。

図には数千人（上杉本では、2,000人）の人物が描かれ、上杉本に描かれた風俗と情報量は、他の洛中洛外屏風絵図の量を圧倒している（例えば、街路名や方位などの文字注記が257件にのぼる）。その人物比定や職業、生活の様子、服飾・髪型などは重要な研究対象となっている。

現存する初期洛中洛外図は四点・・・

歴博甲本（国立歴史民俗博物館所蔵）…屏風六曲一双 紙本着色、大きさは、各隻…縦138cm、横360cmで、重要文化財。



東博模本（東京国立博物館所蔵）、屏風絵の写し十一幅紙本淡彩、縦160cm、横62cmで、模本。上杉本（米沢市上杉博物館所蔵）、屏風六曲一双紙本金地着色、縦160cm、横364cm。国宝。歴博乙本（国立歴史民俗博物館所蔵）、屏風六曲一双紙本金地着色、縦158cm、横364cm。重要文化財。

国宝の上杉本は・・・

米沢藩々主だった上杉家に伝来したもので、絵の内容から、景観の年代は室町幕府十三代将軍、義輝の時代で、永祿四年（1561）以降と推定されている。義輝は、上杉謙信に上洛して管領に就任せよ、というメッセージを込めて贈呈するため、洛中洛外図を狩野永徳に発注した。しかし、永祿八年五月、義輝が非業の死を遂げたため、同年九月に完成した絵は永徳の許に留めおかれた。天正二年（1574）三月のことになる。織田信長が上洛した後、信長に接近した永徳から、洛中洛外図のことを知り、当時同盟を結ぶ必要があつた謙信に対して信長は、この絵を贈つたのである。上杉本はこのような経緯を経て上杉家に伝来したと推定されている。平成七年（1995）に国宝指定された。

花の御所

足利将軍邸の通称で、室町通に正門があるので室町殿、北小路室町にあるので北小路亭とも呼ばれる。



左隻左下

紫宸殿

紫宸殿は天皇の即位などの儀式や節会（祝日の行事）などを行う御殿で、ここには正月節会（元旦の宴）が描かれている。



右隻左上

（清水焼の陶板）

|| 次頁参照 ||

陶板で「上杉本」の洛中洛外図屏風をつくる・・・

京都の伝統工芸の清水焼で「洛中洛外図」がつくられ、京都・山科の「ギャラリー洛中洛外」で公開された。上杉本と同じサイズとするため、左右各二のる陶板は、全体図が上杉本と同サイズとなるように、左右各隻を廿四枚、計四十四枚の陶板によって構成・再現された。厚さ(薄さ)が約2mmという繊細さで、強度をもった陶板の制作に二年、全体像の仕上げには七年を費やしたという。

(清水焼の陶板)



子供の綱引き



門松と餅屋 正月を迎える歳末の風景

山鉾巡行

右長刀鉾…巡行の先頭を行く鉾

左鶏鉾…中国の故事から命名された鉾



餅屋

屏風の左隻四扇中辺りを横切る通りは「小川通」で、左端、縦の通りは「今出川通」になる。通りの上方には公家、飛鳥井家の邸があつて、松の下で楽しむ蹴鞠の様子が描かれている。
歳末の小川通りは、門松作りや餅つきで忙しい。そんな中を節季候物がまじがウラシロを頭につけて練り歩き、琵琶法師が犬に追われている。



焚火

上…お焚火で尻をあぶる子供



下…路地で焚火をする子供

室町時代の民衆の文化

室町時代には都市が発達し、農村では惣村（自治的な地域の結合によってできた共同の組織、惣ともいう）が成立した。また、都市部に住む庶民も文化の担い手になった時代でもある。庶民の間では「御伽草子」が読まれ、狂言や小唄、幸若舞などの庶民芸能も流行した。

御伽草子は、それまで無かった新しい主題を取り上げた短編の絵入り物語、そしてそれらの形式を指し、お伽草子、おとぎ草子とも表記される。室町物語とも呼ばれ、さらに、室町時代を中心とする中世の小説全般を指すこともある。なお、室町時代物語を収集した全集として、『室町時代物語大成』が、1983年から1988年にかけて、横山重・松本隆信共編、全十五巻（本篇十三巻＋補遺二巻）によって角川書店より刊行された。同一作品の異本を含めて480本・約300種の物語を収録している。

食の文化についても、中国から伝わっていた要素を含めて、味噌、醤油、豆腐など、料理の基本的な要素が揃い、商工業の発達によって普及したので、生活は豊かなものとなった。

將軍義政が先導して華開かせた「東山文化」は、武家・農民のみならず、幅広い民衆への展開によって、現代の日本文化の基礎を築いたのである。

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

市民フォーラムは地域情報紙「市民プレス」を編集・発行し、無料で配布します。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

編集部 原宛にどうぞ

TEL 090 (3048) 5502

本紙「市民プレス」は年四回(二、四、七、十月、各五日)発行